

社会で使われている漢字を

吉田 先生のお考えというのは、漢字というのをみんなが使っているんだし、それを別にして教え込むというわけではなくて、目に触れさせていくというのはあたりまえのことではないか。平仮名とか、片仮名とか言うほうが簡単なのではなくて、全体を模様みたいに子どもが見ているということが基礎にあって、はじめてその理解も出てくるのではないかというお考えですね。

石井 それはあとで結果としてそういうことがわかってきたんですけども、私は社会で使っている表記というものを当然教えるのが、それが国語教育だという考えなんです。かりに漢字で書かれたものを学習するのが、子どもたちにとってたいへんだとしても、それを覚えるのが国語教育だと思うわけです。

たとえば「学校」という言葉は社会では漢字で表記しているわけですが、ところが、社会で使わない「がっこう」なんていう表記を別に作るわけです。社会にない表記を別に作って教える。それ

に慣れさせて、あとで本物を教えるから、本物がなかなか身につかない。これは当然のことなんですね。どんな習慣でも、習慣というものは改めにくいものですから、本物を教えるべきである、これが私の主張のいちばん中心なんです。

最初、難しくても本物を教えるのが国語教育の立場である、ということでやったところが、案に相違して漢字のほうがやさしかったと、あとからそういう発見があったわけです。私は最初から漢字のほうがやさしいと思っていなかったんです。やはり一般に考えられるように漢字のほうが難しいだろう、しかし、難しくても本物から教えるべきだ、という考えでやったところが、子どもたちは、いまの子どもは仮名はほとんど一年生にはいってくるときに覚えるんです。ところが、仮名をぜんぜん習得していないような子どもが、漢字と仮名といっしょに習いますと、漢字のほうを先に覚えてしまうわけです。それで、おや、これは漢字のほうがやさしいのかなということで、そのほうの研究をだんだん深めていったわけなんです。